



創立152年

わにっこり

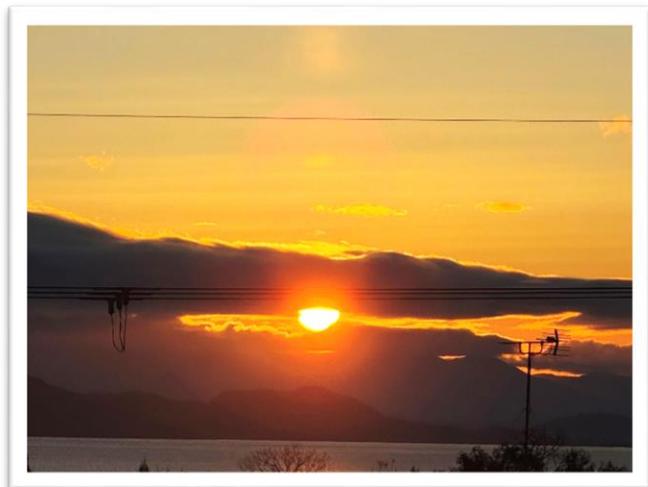
教育目標 わたしから考える子 にこにこ元気な子 つづけてがんばる子 こころを合わせる子

和邇小だより 令和8年 1月号

児童数376名 文責 澤村幸夫



夢をもつこと



謹んで新年のお慶びを申し上げます。今年も、保護者や地域の皆様の温かなご支援とご協力をいただき、家庭や地域とのいっそうの連携の中で、一人一人の子どもたちが健やかに育ってくれるよう努めてまいりたいと思います。

私のレファレントパーソン(自分の価値観や判断基準、行動の参考にしたり、目標としたりする「理想の人物」のこと)である植松努さんのメッセージには、これからの社会をたくましく幸せにいくために必要な力が述べられています。「人は足りないからこそ助け合える」「わたしたちがすべきことは勇気を出して頼ること」「教育とは失敗を安全に経験させて、失敗の乗り越え方を教えるためのもの」「学校とは世の中の理不尽の解決の仕方を教えるためのもの」、どれをとっても、とても考えさせられるメッセージです。

植松努さんメッセージ

紙面配布のみ表示



期間限定 1/7~1/31

そんな植松努さんが、勤めておられる「ロケット教室」を11月26日に実施しました。卒業をひかえる6年生を対象に行われたこのプロジェクトは、「好きなものビンゴ」から始まります。自分が心から好きなものをいくつも考え、グループで交流します。この活動を通して、子どもたちは「夢をもつこと」の意味や大切さに気付いていきます。次に植松努さんのビデオメッセージを視聴します。ロケット教室に込められた願いを受け取ります。そして、一人一機、ロケットを製作します。作り方が分からなければ周囲に訊けば良いのです。助け合うことを学びます。

いよいよ全校児童が見守る中での打ち上げです。その時には、自分のロケットだけ飛ばなかったらどうしよう、という不安が生まれます。しかし、勢いよく空高く打ち上がる自分のロケットを見て、小さな自信が生まれます。ここで、6年生の子どもたちが書いた感想の一部を紹介します。

ロケット教室

紙面配布のみ表示



期間限定 1/7~1/31



◆うまく飛ぶかな、とワクワクしながら楽しめた。ロケットには夢を書きました。空高く飛んだロケットを見て「叶うかな!」と希望を持ちました。◆最初のビンゴでは、相手はどんなことが好きなのが分かったし、自分の好きなことを相手に話すのってこんなに楽しいのだなと思いました。◆植松努さんの言葉が心に残りました。中学生になっても心に残っていると思います。◆ロケットの説明書を見た時、「うわー無理!」と思ったけど、周りの人たちの助けのおかげで、あきらめずにやれてうれしかった。◆ロケットを打ち上げる時、とても緊張と不安でいっぱいでしたが、無事打ち上げることができてよかったです。◆ビンゴは友達と好きなものを言い合うことができるので、友達の知らないところも知ることができて、とても楽しかったです。

自ら課題を見つける

和邇川河川敷のぼり

「探求」の学びが注目されています。これまでの「課題解決学習」から「自ら課題を見つけ、周囲と協働して解決していく力」が求められています。つまり、用意された課題を解決するだけに留まらず、身の回りにある課題を自ら見つけ、課題解決に向けて仮説を立て、解決方法を考え、周囲を巻き込んで解決に向かうプロセスを大切にする学習

です。4年生の理科の学習に、「和邇川にのぼり旗を立てよう」というテーマを設けました。小さい頃から馴染みのある和邇川や和邇公園にどんな課題が見つかるのだろうか。子どもたちは、環境保全の観点から、各自個性豊かな「のぼり旗」の図案を描きました。その中の10人の作品を拡大機で、専用紙に印刷



しました。河川敷にのぼり旗を設置するには、河川法のもと、知事の許可が必要です。県事務所に申請をして、ようやく許可が下りました。1月末までの3か月間です。子どもたちが描いたのぼり旗は、メッセージも絵柄も実にさまざまで、魅力的なものでした。和邇公園を通られた折に、ぜひご覧ください。



2学期の体験活動

まとめ

2学期のまとめ

紙面配布のみ表示



期間限定 1/7~1/31

2学期には、それぞれの学年で、さまざまな体験活動（行事）がありました。動画にまとめましたので、ぜひご視聴ください。

家族ふれ愛標語

なつやすみ かぞくで
プール たのしいな
1年 木下 央士

いちにちの いやしは
かぞくの あいさつで
1年 田中 春妃

ねる前に かぞくみんな
なで ハイタッチ
2年 多谷 美佑

ねるまえの パパの
絵本が ゆめになる
2年 菅野 朔太郎

指おって かぞくで
ひょうご 考える
3年 築山 陽緋希

朝ごはん かんしゃの
気持ちで いただきます
3年 橋本 朔空

わらい合い どんどん
ふえてく 家族パワー
3年 大道 琉斗

家族の笑顔 幸せのかぎ
心ぽかぽか あったかい
4年 コンドン 琉生

家族の愛 はずかしがらず
行動に
4年 奥富 翔大

いってらっしゃい 無事を
祈る おまじない
5年 渡邊 湊

自分から 進んで手伝い
母笑顔
5年 上井 柊太

スマホより 家族の時間に
目を向けて
6年 中野 莉衣帆

毎日の 炊きたてご飯
ありがとう
6年 溝 陽良



第10弾 「災害時の避難所生活」

このコーナーは、子育てと子どもの幸せをサポートする情報を提供するニュースレターです。子育てのヒントやこれからの時代に大切にしたい教育の話、健康で幸せな生活に役立つ情報を掲載したいと考えています。未来をたくましく生きる子どもたちにつけてほしい本当の力とはいったい何か、子どもが生涯にわたり幸せに生きていくには、周囲の大人はどんな関わりを大切にしていけば良いのかについて、共に考えていきたいと思います。

第10弾は、「災害時の避難所生活」についてです。ちょうど2年前の1月1日、能登半島地震が発生し、指定避難所となった学校施設では、多くの被災住民が長い期間、避難所生活をする事となりました。私は、今年の夏休みに、避難所となった学校の関係者と懇談をする機会を持つことができました。また、年末年始には、いくつかの報道番組で、この能登半島地震の当時と今を特集番組として放映されていました。

第10弾は、「災害時の避難所生活」についてです。ちょうど2年前の1月1日、能登半島地震が発生し、指定避難所となった学校施設では、多くの被災住民が長い期間、避難所生活をする事となりました。私は、今年の夏休みに、避難所となった学校の関係者と懇談をする機会を持つことができました。また、年末年始には、いくつかの報道番組で、この能登半島地震の当時と今を特集番組として放映されていました。



ダンボールパーテーションと簡易テントでプライバシー保護

日本は、地震や台風など自然災害の発生率が高い国です。したがって、近年では災害被害を防ぐ「防災」だけでなく、被害を最小限にとどめる「減災」がより重要視されています。そして、最も注目したいのが「災害関連死」の問題です。長期化する避難生活で体調を崩し、持病が悪化し命を落とすといったケースです。「直接死」より「関連死」の方が多いと知って、たいへん驚きました。体調を崩す要因として、断水によりトイレの衛生環境が保てず、水分補給や食事の量を減らし脱水症状になる、停電により、避難所の暑さ寒さ対策が不十分である、床にマットを敷いて雑魚寝をすることで感染症リスクが上がる、プライバシーが確保できず、高いストレスにさらされる、医療や福祉の体制が整わず対応が遅れる、などがあげられます。

和邇小学校では、毎年、6年生が「防災学習」を積み上げています。また、希望者による「親子防災キャンプ」も、今年で3年目となりました。12月6日、7日に1泊2日で実施した今年度の防災キャンプは、PTA や消防団、自主防災会、消防署など多くの皆様に協力いただき、のべ100名を超える参加者がありました。

簡易トイレ（洋式便座と男女別プライバシーテント、凝固剤）（6か所）を実際に使用することで、安心できるトイレ機能を確認しました。電源不要の灯油ストーブの設置と燃料の確保、毛布やクッションシートの活用、6年生児童が作ったかまどベンチによる炊き出しと薪の備蓄、プライバシー確保のためのダンボールパーテーションと簡易テントの追加設置、寒さや感染症を防ぐダンボールベッドの追加および新調、常設ポータブル蓄電機からのLEDライト照明など、和邇小学校の体育館が実際に避難所になった時のシミュレーションができました。

学校が指定避難所になった時に、学校として一番に考えるべきことは「一刻も早い学校再開」です。なぜならば、被災した子どもたちの心のケアが重要だからです。心に傷を負った子どもたちにとって、友だちとの再会や遊びは、心を癒すのに効果的であるからです。したがって、普通教室は、避難所として開放せず、体育館や運動場、特別教室のみに限定することが大切です。大勢の被災住民が体育館に避難してきた時に、「減災」を可能にする機能を確認できるかについては、今後の大きな課題です。



男女別プライバシーテント（内側からのみファスナー開閉）内部に簡易トイレと凝固剤



かまどベンチによる炊き出しカレーライスを作りました

学校が指定避難所になった時に、学校として一番に考えるべきことは「一刻も早い学校再開」です。なぜならば、被災した子どもたちの心のケアが重要だからです。心に傷を負った子どもたちにとって、友だちとの再会や遊びは、心を癒すのに効果的であるからです。したがって、普通教室は、避難所として開放せず、体育館や運動場、特別教室のみに限定することが大切です。大勢の被災住民が体育館に避難してきた時に、「減災」を可能にする機能を確認できるかについては、今後の大きな課題です。

2年前の能登半島地震では、石川県内の25%の公立小中学校が、3学期の開始を遅らせ、休校を余儀なくされました。自宅の被災や余震が続くことによる子どもたちのメンタルケアについても、今後の課題として意識していきたいと思います。